
私は所謂装備品です

コーギー軍曹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は所謂装備品です

【Nコード】

N2034Y

【作者名】

コーギー軍曹

【あらすじ】

1人の男が全世界の運命を背負い、絶望の宇宙へと旅立つ。これは、とある男の愛と勇気と血と涙、そしてSAN値あふれるSF冒険ファンタジーである！

と、言う様な事は一切有りません。アホな作者のアホな作品です。更新は不定期になる予定。

プロローグ1 月は出ているか？（前書き）

これは「我々は大勢であるがゆえに」の息抜き感覚でかいています。
更新は気分次第です。
ではドーゾ。

プロローグ1 月は出ているか？

「やあ諸君、よく来てくれた。

まずはお茶でもどうだい？ 砂糖とミルクはいるかな？

え？ そんなもの入れない？

ハハハ、確かに緑茶に砂糖は無いね。

ん？ ああ、ミルクは中々イケるものだよ。今度試してみるといい。まあもちろん、君たちの口に合う保証はないがね」

辺りを見回す。

十程の影が集まりこの話を聞いている。

「……所で、さっきから何処を見ているのかね？

私は此処、君の目の前のテーブルの上だ。

そう、その緑色の筋繊維が詰まっているかのような円形の物体だ。

中央に半球状の金属が見えるだろう？ それが私さ。

何処から声を出しているのかって？

そんな無粋なことを聞くもんじゃないさ。

そう言う物だと思ってくれればいい。

さて、何から話そうか。

私の故郷の話でもしようか。それとも両親、兄妹、友人の話か。以前話した物語の続きでも話そうか。

たまには君たちの話も聞きたいものだがね。

何時も話をしているのは私ばかりだから、たまにはいいだろう？

なに？ いや？ そうか、それは残念だ。

何時か話してくれるまで待つとしよう。

では、今日は私の生まれの話をしよう。

ああ、そこに腰かけて聞いてくれ」

「ふう」と息を吐き、話を始める。

「私は地球と言う星の、日本と言う国で生まれ育った。

私の生まれは田舎でね、周りは森ばかり緑豊かな場所だった。

周りも優しい人ばかりだった。

ただお年寄りばかりでね、同年代が2人しかいなかった。

俗に言う幼馴染と言う奴でね、よく3人で遊んだものだ。

いつのころからか、あまりしゃべらなくなってしまったがね。

今頃、何処で何をしているのやら。

まあ、其れを確かめる術はもう無いのだがね。

小中と近くの学校に通った。近くと言っても片道2キロ半はあった。

そして高校。これはもっと遠かった。

駅から電車で1時間掛けて通った。毎朝5時起きさ。

そして大学。こいつはさらに遠くてね、一人暮らしをすることになった。

生物系の学科に進んだよ。

もともとは機械科に手を出そうと思っていたんだ。

だが、高校生の多感な時期にマンガやゲームに触れすぎたせいだろ

う、生物系に進んでしまったのは。
私はガン ムを造りたかったが同時に寄 獣も造って見たかった。
今思えば馬鹿な考えだったが……。

こうして大学に通い研究室に入り、研究に没頭した。

研究上法に触れることも幾つかやった。無論、盗みや殺しのよう
な事はして無いぞ。
楽しかった。

そして私が21の時、研究中に謎の爆発が起き、それに巻き込ま
れた。
扱っていたのは微生物だった。爆発なんぞ起こるはずがなかつたの
さ。

だが私は死んだ。

ここまでが私の、私が人間だったころの一生だ」

「まあ、お茶でも飲んで1息つきたまえ。

こんなところだろう。

では、今の話をしよう。

今の私は人ではない。

今の私は……強殖^{ユニオン}装甲だ。

いや、正確に言えば違うな。

中央に輝く制御装置コントロールメタル、これが私だ。

そう、私は強殖装甲となったのだ。
爆発に巻き込まれ死んだと思ったら、金属球の中。
まったく、人生とは何が起こるか分からんものだな……」

ズズズ……。

お茶を啜る音が狭い部屋の中かに響く。

すると1つの影が唐突にこう言った

「お主ノ生い立ちは分かった。

しかし……モルモット実験用ノ生物に対して話しかけるノはやめてくれんかノ
」。

見ていて悲しくなると言うか、少し痛々しいと言うか……。
暇なノは分かるがもう少し何とかならんかノ？」

「誰のせいだと思っていやがるんですかこの蟲爺！」

これが、最近の何気ない日常の会話である。

プロローグ2 回想回

「やあ諸君、よく来てくれた。
私は強殖装甲だ。」

今日は何を話そうか。

私が如何に非モテ人生だったか、どれ程の非イケメンだったかの話をしようか。

それとも友人と呼べる者が片手の指ほどしかいなかったという事でも話そうか。

仲の良い友人2人(男女)に冷やかして『お前ら実は付き合ってるんだろ?』と言ったら『何で分かったん?』って恥ずかしそうに言い返された時の、あの何とも言えない心の状態でも語ろうか……」

「自虐ネタに走るとは、寂しい奴じゃなお」

蟲面の爺さんが突っ込む。

ネタとか一体どこでその言葉知ったんだよ。

「うるせーよ。いいだろ別に。私が自虐に走ったところで爺さんは痛くも痒くもないでしょうに」

「何故か見てイテ辛いんじゃない……」

「……」

「……暇じゃな〜」

「……………暇だな。
暇だし回想でもするか」

何故このような体になったのか、其れを語らねばならんだろう。

「それじゃあ、回想スタート!」

??????????

「うーん、むにゃむにゃ。後5分……………んん?」

私の目覚めた場所は、薄暗い場所だった。

「ここは何処だ?

確か菌の実験中に何かが爆発して、それから……………。
ここは何処だ?

……………。
いやいやいや、ホントに此処何処だ。

何て言うか、無機物じゃない。壁が有機的な何かでできてる。
何かちよつと気持ち悪い」

その部屋はまるで生物の皮膚の様な見た目の壁で覆われていた。

「それにこれは、水か? 部屋全体が水に浸かっている。
いやこれは水じゃないのか? だけど一体何だこの液体は。
て言うかさつきから全く体が動かない!?

これは……………ゴ ゴムの仕業か!? ゆゑるさん!」

その後よく分からない何かの機材的なものに入れられた。

嗚呼、これで私もおしまいか(？)

すると中に青白い光が差し込み……あれ？……何だか……意識が……遠のいて……い……く……。

「起キ口」

「うーん、むにゃむにゃ。後5分……誰だ！」

「起キ、タカ……」

「キヤ、シャベッタ！」

「言葉ヲ話シ、テハ可笑シ、イノカ？」

「あ、いえ。そう言う訳じゃないです。唯のお約束と言う奴です」

「ソノ様子デ、八通ジテイル、ヨウダナ」

「そう言えば何で急に日本語を？ ちょっと片言だけど……」

「面白、イ、実ニ興味深イ。

ドウ、ヤラコノヨウナ事が起コツタ、原因ハ私ニアルラシイ」

「え？ 何が？ 何で？」

「才前ノ記、憶ヲ見セテ貰ツタ」

「どうやって?」

「お前ノ、コントロールメタル。その情報を覗^{メモリー}カセテ貰ツタ」

「^{コントロールメタル}制御装置? 何それガイバー?」

「ガイバー? ^{ガイバー}規格外品ガドウカシタノカ?

「アア、ナるホドソウ言う事力」

「勝手に自己解決するのって気になるからやめてもらえませんか?」

「ああ、すまなかつたナ。」

「所で、あなたは誰なんです? 唯の虫と言う訳ではないのでしょ
う?」

「当然ダ、アノヨウナ原始的生物、ト一緒ニサレテは困る」

「はあ」

「我々はウラヌスデアル。ソレトモお前ニハコウ言ツタ方ガイイカ?
『降臨者』トナ」

「な……なんですとー!」

????????????

「以上、回想終了!」

「結構適当じゃノお。

もつと色々あつたはずじゃが」

「黙らつしやい!

……そう言えばまだ聞いて無かつたな。

あんた確か私がこんなことになったのは自分のせいだと言っていたが、一体何をしていたんだ?」

「ンン? それはノ、実は次元連結システムのちよつとしタ応用実験をしテおつたノじゃが、どうやらその際に起きタ、トラブルが原因らしいノ」

「へ〜……へえ!?!」

今何かとんでもない物をサラツと言わなかつたか!」

「ンン〜。トラブルか?」

「いやその前だよ、前!」

「次元連結システムのことか?」

「そつだよ、それだよ!

あんたまさか ゼオライマー天でも造つてんのか!
衝撃の事実。

木原マサキは、実は降臨者だつたんだよ!」

「な、なんだつてー!」

「誰じゃこいつ等。」

それに何を言つとるんじゃお主は。

そもそも次元連結システムとは「長くなりそうだからいいや」……
そうか「

こんな感じで本日は終了。

「お疲れ様です」

「誰だお前ら？」

プロローグ3 主人公の能力設定と小話(前書き)

ギャグの道をまっしぐら。

一度でいいから強殖装甲着てみたい……。

それではドーゾ。

プロローグ3 主人公の能力設定と小話

「やあ諸君、よく来てくれた。
私は強殖装甲^{ユニット}だ。

今日は何を話そうか。

何？ 私の能力について話せと？

ふふふ、よからう。

……。

……。

……。

面倒くさいから最近流行りのFate風にまとめてみた」

【CLASS】ユニット

【マスター】????

【真名】御茶ノ水 賢^{けん}

【性別】元

【身長・体重】30?・1~2kg

【属性】中立・善?

【筋力】?

【魔力】?

【耐久】?

【幸運】?

【敏捷】?

【宝具】?

殖装する生物の能力によって変化するが、ユニット時では粗^ざ0である。

【保有スキル】

殖装

捕食の事。

捕食した知性体と有機的に結合し、その生体機能を強化・増幅する。

過剰防衛システム

殖装時のみ発動可能。

殖装者の意識が失われてから一定時間経過しても回復しなかった場合、殖装者の生命を維持するため立ち塞がる者は敵味方の区別なく撃破する。

「ま、こんなところか。言い忘れていたが、私の生前の名前は御茶ノ水賢と言うのだ。

それでどうかね？ この能力を見て。

何？ 全然大したことない？

仕方ないだろう。元々強殖装甲は装備品の様なものなのだ。

装着する者がいなければ真価は発揮できんよ。

む？ 何だねその目は。まるで口ばかりで全然使えない奴でも見るかの様じゃないか。

私は剣と楯の付いた鎧の様なものだよ。鎧は独りでに動くことはない。

無論私は普通の鎧とは違うから、単体で動き回ることも不可能ではない。

ただその場合は誰かのDNAが必要となる。

君、DNAくれないか？ 腕や足でかまわんぞ？

嫌か？ そうか、それでは仕方ないな。

所で、最近の少子高齢化問題についてなのだが「すまんが、ちょっと聞きタイことがあるンじゃが？」……なんだよ。人がイイ気分で独り言を言っている時に」

「悲しい奴じゃノ……」

「それで？ 何か用があるんじゃないのか？」

「ああ、そうじゃそうじゃ。」

「この巨人殖装ギガンティックと言う奴に付いて何じゃが」

「ギガンティック？ それがどうかしたのか？」

「大体あんたは私の記憶を見たんだろ？」

「それ以上は何も知りませんよ」

「あれは記憶を少々覗イタ程度と言う意味じゃ。」

「全てノ記憶を見るなどと言う事は、余程ノ暇人でなければやらンわイ。」

「それよりギガンティックじゃ。」

「ガイバーナビゲーションメタルの意志に反応し、航行制御球が蓄積されタ我々のノウハウを基に宇宙船フネノ組織と強殖細胞を融合させタ誕生させタ武装形態なのじゃろ？。」

「所謂戦闘型ガイバーと言う物じゃな。」

「航行制御球ナビゲーションメタルがその形状まで変化させタと言う事は、今まで起こッタ例がない。」

「人ノ意思とは素晴らしい。流星は兵器として生み出されタだけノ事はある。」

「より強くなるうとする意志は計りしれン物があるノ」

「それで何が言いたいんです？」

「お主も同じような事出来ンか？」

「はぁ？」

「お主が強イ意志を持たぬ、根性無しノヘタレであると言う事は分かッテおる。

じゃが、何事も挑戦だとは思わんか？」

「嫌ですよ、メンドクサイ！」

爺さんがやればいいでしょう。

えらく感情豊かだし、航行制御球ナビゲーションメタルだつて認めてくれますよ」

「何を言ッテおる。

どんなことも試しテみねば始まらんじやろつ。

来タまえ！ 早速実験じゃ！」

「ちよつ、やめ……離せ、離せ、H A・N A・S E！」

やめろシヨツカー！ 俺をどうするつもりだ！

な、何だその妙な装置は。またあの光が！ や、やめろ
！」

アッ
！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2034y/>

私は所謂装備品です

2011年11月6日04時09分発行